

石の花

パーヴェル・バジョーフ 作

島原落穂 訳



<著 者>

パーヴェル・パジョーフ

1879年—1950年。鉱山労働者の家庭に生まれ、神学校を卒業後、革命まで地方の国語の教師をしていた。革命後、新聞記者を経て文学の道に入り、『ウラルの昔話』、『孔雀石の小箱』など、説話物語や民話を書いた。中でも、ウラル地方の昔話や鉱山労働者の生活を素材にしたものが数多く、すぐれている。

<訳 者>

島原落穂（しまはら おちほ）

東京都に生まれる。普通土学園、慶応義塾大学付属外国語学校ロシア語科卒業。現在、日ソ学院本科講師。日本ロシア文学会、日本児童文学者協会会員。ソビエト児童文学の翻訳に『みどりの仮面』（岩波書店）、『少女マーカ』、『白いあざらし』（以上童心社）がある。
現住所 東京都杉並区下井草5-18-17-302

石 の 花

1979年9月25日 第1刷発行◎

1980年5月15日 第3刷発行

著 者 P. パジョーフ

訳 者 島原落穂

発行所 株式会社 童心社

東京都新宿区三栄町22

電話 03(357)4181 (代表)

振替 東京 1-75504

印 刷 新興印刷製本株式会社

平 版 小宮山印刷株式会社

製 本 株式会社難波製本

NDC983/©1979/160p/21.6×17.6cm

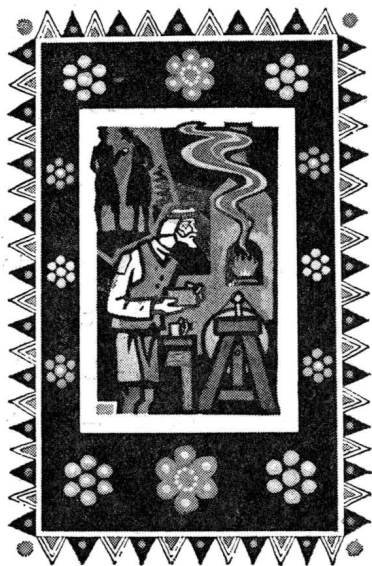
8097-010320-5253 Printed in Japan

この本におさめられた5つの物語の舞台は、ウラル——
ヨーロッパ・ロシアの東端にある鉾山地帯です。全長2000
キロにおよぶウラル山脈が南北に走り、鉄鉾石や銅や金や、
さまざまな鉾物が採れます。だから、このあたりには、古
くからたくさんの工場がありました。

この物語のころのロシアは、貴族や地主が、民衆を農奴
とよんで、奴隷のようにこき使い、自分たちはやりたい放
題の暮らしをしていた、農奴制国家の時代でした。

ウラルでは、農奴たちは工場、鉾山労働者として使われ
ていました。農奴たちの住む村も工場（ザヴォード）とよ
ばれ、村全体が、工場主、鉾山主の旦那のものです。旦那
はみやこで優雅に暮らし、村には管理人をおいて、おと
なはもちろん、子どもまでも、いやおうなしに働かせてい
たのです。

ステパンやダニーロが住んでいたボレヴァヤ村も、エカ
チェリンブルグ（いまのスヴェルドロフスク市）の南西約
60キロのところにある、そんな工場の村でした。近くには、
大理石細工を作っていた大理石（ムラーモル）とよば
れる村もありました。



A. ペリューキン 画

もくじ

訳者あとがき	158
訳註	155
もろい小枝 こえだ	137
山の石工 いしく	113
石の花	69
孔雀石の小箱 こばこ	25
銅山のあねさま やま	7
はじめに 訳者から	1

Избранные сказы П. П. Бажова
“Медной горы Хозяйка”, “Малахитовая шкатулка”,
“Каменный цветок”, “Горный мастер”, “Хрупкая веточка”
из книги “Малахитовая шкатулка”,
© Оформление. Издательство «Художественная литература»
Москва, 1977

本書のA. ベリューキンの挿絵は、日ソ著作権センターを通して、
ソ連邦著作権協会との契約に基づき使用されたものである。

石
の
花

ソビエト連邦主要地図



銅^や山^まのあねさま

ある時な、わしらの村の者がふたり、草のようすを見にいった。村の草場は遠方にあつた。どこか、セヴェル―シカ川のさきのほうだ。まつりの日だつた。ひどく暑かつた。まるで日かげもなかつた。ふたりはお山で働いていた。つまり、グミョ―シキ銅山^{どうざん}でだよ。孔雀石^{くじやく}をほり出し、藍銅^{らんどう}鋳^きもほり出していた。そう、そのころは、自然銅^{しぜんどう}の結晶^{けつしょう}も手にはいつたし、使えるものはみんな採^とつていたのだよ。

ひとり^{わかもと}は若者^{わかもと}だつた。ひとり者^{ひと}だつたが、もう目に緑^{みどり}の色^{いろ}が光^ありはじめていた。もうひとり^{ひと}は、すこし年上^{とし}だつた。この男^{おとこ}は、まるで仕事につかれきつていた。目も緑、ほおもまっ青。そしてな、しじゅう咳^{せき}をしていた。

森のなかはよかつたねえ。ことりたちが、たのしげにうたつていた。地面からはかげろうが立ち、空気はさわやかだつた。ふたりはな、暑さにつかれて、クラスノゴルカ鋳山^{こうざん}までいきついた。ここでは、そのころ、鉄鋳石^{てつこうせき}をほつていたのだよ。ふたり、ああ、村のやつらのことさ。ふたりはなななかまどの下草に寝^ねころんだ。そして、すぐ眠^{ねむ}つてしまった。

ふいに、若いほうが、だれかにわきつ腹^{はら}をつつかれたみたいなきがして、目をさました。見ると、

目の前の大きな岩のそばの、鉱石の山の上に、だれか、おなごがすわっている。若者に背を向けてな。おさげの髪からさつすると、むすめらしい。髪は緑にも見える黒髪でな、ふつうのむすめのおさげみたいに、ゆさゆさゆれてはいないんだ。まるで、背なかにはりついたみたい。すそに結んだリボン、赤いようでもあれば、緑のようでもある。透けて光って、うすい銅箔のような、かすかな音を立てている。若者は、この髪にびっくりして、なおもじっと見つめていた。

むすめは、あまり背が高くなく、ようすがいいんだ。よくまわる車のように、すこしもじっとしていないんだ。足もとで探しものでもしているかのように、前にかがんだり、と思うと、うしろにそりかえる。右に体をくねらせたり、左にくねらせたり、ぱっと立ちあがって、両手をふりまわすかと思うと、また、前にかがみこむ。ひと言でいうならな、目まぐるしいむすめさ。何かいっているのがきこえるが、どこのことばかはわからないし、だれとしゃべっているのかも見えない。だが、しじゅうくすくすわらって、どうやらたのしいらしいんだ。

若者は、何かいおうとした。と、ふいに、首すじを、がん！ と、たたかれたみたいなきがした。「なむさん！ あれは銅山のぬしのあねさまにちがいない！ あねさまの服だよ。なんで、おれ、すぐに気がつかなかったんだ？ あのおさげで、おれの目をくらましたんだな。」

服は、たしかに、この世にふたつとないものだ。絹のつやの孔雀石で作った服だ。そんな種類の石があるんだ。石だが、見た目は絹のようで、手でさわってみたくなる。

へこいつあ、ことだぞ！ どうすれば、気づかれないうちに、逃げ出せるか。へ

若者は、なあ、年よりたちから銅山のあねさま——孔雀石の精だよ——は、男をからかうのが好きだと、きかされていた。

こう思ったとたんに、あねさまもふり向いた。ゆかいそうに若者を見て、白い歯を見せ、からかった。

「あんた、どうして、ステパン・ペトロウィチ、美しいむすめさんを、無料でじろじろ見ているの？ 見るにはお錢がいるのよ。もうちょっと近くにいらっしやい。すこうしお話しましょ。」

若者は、むろん、たまげたねえ。だが、ようすには見せなかった。ぐっとこらえた。あねさまは、ふしぎな力をもつてはいるが、何といってもおなごだ。そうさ、若者は男だ。男がおなごにびくびくしちゃあ、つまり、きまりが悪いつてことさ。

「おれ、話していくひま、ないんだ。」若者はいった。「そうでなくとも、寝すぎしちゃってよ。草を見にきたんだよ。」

あねさまはちょっとわらって、それからいった。

「へたな芝居は、もうたくさんよ。いらっしやいつていつてるのよ。用があるわ。」

そう。若者は、しかたがないって思ったね。あねさまのほうに歩き出した。あねさまは手まねきをする。鉱石の山を、向こうがわにまわれとな。若者はまわった。すると、そこには数知れないとかげがいた。とかげは、みんなちがう色だ。あるものは、たとえば、緑色だ。あるものは、青くそめたみたいになっ青でな。それから、金のぼつぼつのはいった粘土か砂の色。ガラスか雲母みたい

に、きらきら光っているものも、枯草色のも、また、模様のついているものもある。

むすめはわらった。

「わたしの兵隊さんを、ふんづけないでね。ステパン・ペトロウィチ、あんたは、ほうら、とても大きくて、重たいわ。けど、わたしの兵隊さんは、ちっちゃいのよ。」

そしてな、ぼんぼんと手をたたいた。とかげは散って、道をあけた。

若者は、あねさまに近づいて、立ちどまった。すると、あねさまは、また手をたたいた。そうして、いった。やつぱりわらいながらだよ。

「もう、あんたは、足をうごかすところもないわ。わたしの家来をふみつぶしたら、よくないことがおこつてよ。」

若者は足もとを見た。すると、地面が見えないんだ。とかげどもが、みんなひとところに集まって、足もとが、模様のある床みたいになっている。ステパンが見ると、何ということだ。床は、銅の鉱石なんだ。あらゆる種類の銅だ。よくみがかれている。雲母もある。閃亜鉛鉱もある。つややかなさまざまな光、孔雀石そっくりなものもある。

「さあ、もう、わたしがだれだかわかったわね、ステパヌシコ？」

孔雀石の精は、いいながら、ころころとこぼれるようにわらい、すこしして、

「怖がらなくてもいいの。あんたに悪さはしないわ。」

若者は、むかつとした。おなごが自分をあざわらって、おまけにこんなことをいうんだもの。若

者は、ひどく腹を立てて、どなっていました。

「おれ、だれのことも、怖くなんかないぞ。鉦山のなかで働いてもな！」

「そりゃあ、よかったわ。」孔雀石の精はいった。「わたしは、ちょうどそんなひとを、探してたのよ。だれも怖くなんかないひとをね。あした、鉦山にはいったらね、そこに、あんたたちの村の管理人がきているわ。あんた、管理人にいうのよ。ね、文句をわすれないでね。いいこと？」

——銅山のぬしのあねさまが、おまえに命令している。くさい牡やぎよ。おまえが、クラスノゴールカ鉦山から、立ちのくように。もしも、おまえがこれからも、あねさまの鉄かぶとを砕くようなら、あねさまは、グミョーシキ銅山の銅を、二度とふたたび探れないように、すっかり深くかくしてしまう。——」

こういうと、あねさまは目をほそめた。

「わかつて？ ステパーヌシコ。鉦山で働いてるっていったわね？ だれも怖くないっていったわね？ だったら、わたしのいったとおりに、管理人にいうのよ。さあ、もういきなさい。そしてね、いっしょにきたあのひとには、いいこと？ 何もうわないのよ。あのひとは、働きすぎて、くたきたよ。あのひとを心配させることもないし、まきこむこともないわ。藍銅鉦の精に、わたし、いつておいたわ。あのひとをすこしたすけてあげるようにって。」

あねさまは、また手をたたいた。すると、とかけどもは、さっと散った。あねさまも、ひょいと立ちあがった。岩に片手をかけ、ぴよんとはねると、とかけのように、岩をつたって走り出した。

手足が、緑色の四つ足にかわった。尾っぽが生えて、背すじには、半分ぐらいまで、黒いすじが走った。だが、頭は人間の頭だ。岩山のでっぺんまで駆けのぼると、ふりかえって、いった。

「わたしのいったこと、わすれないでね。ステパーヌシコ！ 銅山のあねさまが、おまえに命令している。くさい牡やぎよ、おまえがクラスノゴルカ鉱山から、立ちのくように。いうとおりにやってくれたら、あんたにお嫁いりしてよ！」

若者は、腹立ちまぎれに、つばをはいた。

「ちえっ！ なんだ、いやらしいやつ！ おれが、とかげを嫁にするだと！」

だが、あねさまは、若者がつばをはくのを見ると、ころころとわらった。

「よくってよ。」あねさまはさげんだ。「いずれ話しあいましょ。その気になるかも知れないわね？」

そして、たちまち、山の向こうがわにかくれた。緑色の尾っぽが、ちらりと光っただけだった。若者は、ひとりになった。山はしずかだった。鉱山の山のかげで、仲間のかくいびきだけがきこえる。仲間をゆりおこして、草場について、草を見て、日暮れごろに家にもどった。

だが、ステパンの頭のなかには、ひとつのことが、こびりついていて、どうしようか？ あんなことばを管理人に言えば、大事になる。それに、管理人はほんとうにくさいのだ。体のなかで何かがくさっているんだと、みんなはいつていた。いわずにおくのも、やっぱり恐ろしい。なぜって、あのひとはあねさまだ。どんな鉱石も、にせものにかえてしまうことができるんだ。なら、いわれ

たようにしようか。もつとはずかしいのは、おなごの前で、自分がほらふきたと、見せてしまうことだ。

考えに考えて、勇気を出した。

「とにもかくにも、あねさまのいったようにしよう。」

翌朝はやく、昇降機のそばにみんなが集まると、村の管理人がやってきた。みんなは、むろん、帽子をとって、だまつている。が、ステパンは近よって、いった。

「おれ、ゆんべ、銅山のぬしのあねさまにあった。あねさまが、あんたにつたえろと、いいつけた。くさい牡やぎのあんたに、あねさまはクラスノゴールカ鉱山から立ちのけと、いいいなさる。もしも、あんたが、あねさまの鉄かぶとを砕くようなら、グミョーシキ銅山の銅を、だれにもほれないように、みんなかくしてしまふと、いいいなさる。」

管理人の、ひげがふるえ出した。

「おまえ、何だ？ 酔っぱらっているのか。気がくるったのか？ どのあねさまだ？ だれに向かつて、そんな口をきいているんだ？ わしは、おまえを、鉱山のなかで朽ちさせてやる！」

「どうぞ、ご勝手に。」と、ステパンはいった。「ただ、おれは、そういいつけられただけだよ。」

「こいつを、ひっぱたけ！」管理人はどなった。「鉱山のなかに引きずりおろして、切羽につないでおけ！ くたばっちまわないように、からす麦のくずでも食わせて、仕事は目こぼしするな。ちよつとでも何かあったら、容赦せずに、なぐってやれ！」

若者は、むろん、鞭うたれ、鉦山に追いやられた。鉦山の監督は、やはり犬にもおとるひどい男だったが、若者に切羽をわりあてた。これ以上ひどいところはない、というやつよ。水びたしでな、いい石は出ない。とくに廃坑にしなければならんやつよ。ステパンは、切羽に、長い鎖でつながれた。つまり、体をうごかして働けるようにだよ。どんな時代だったかは知っているね。農奴制の時代だよ。ひとびとはいじめぬかれていた。監督は、そのうえ、こういった。

「ここで、ちょっとばかり涼むんだな。おまえのすることは、質のいい孔雀石を、これこれだけほることだ。」と、まるで、べらぼうな数字をいいわたした。

どうするわけにもいかない。監督がそばをはなれると、ステパンは、つるはしをふりあげた。やっぱりしつかり者だったんだな。すると、なかなかいいんだ。まるで、だれかが両手でまいているみたいに、孔雀石がおちてくるんだ。切羽の水もどこかに引いて、かわいてきた。

へはい、いいぞ、おれのこと、あねさまが思い出してくれたらしいぞ。〓

こう思ったとたんに、ふいに、ぱっと明るくなった。見ると、あねさまがいる。目の前にいる。

「えらいわ。」あねさまがいう。「ステパン・ペトロウイチ。よくやったわ。くさい牡やぎを怖がらなかつた。うまくいってくれたわ。さあ、わたしの持参金を、見にいきましょう。わたしも、約束は守るのよ。」

だが、まるで、困ったというみたいに、ちょっと顔をしかめた。手をたたいた。とかけどもが走りよって、ステパンの鎖をはずした。あねさまは、とかけどもに命令した。